諏訪市の温泉統合

諏訪市長　岩　本　節　治

第34回日本温泉科学会大会を当地に於いて開催されたことを，市長として感謝申しあげる。

市長を20年やっているわけだが，日頃市民と接していて感ずるのは，いろいろな面で如何に住民と温泉のつながりが深いものか，ということである。そのようなわけで，市長に就任以来何とか諏訪市の温泉を統合してゆこうという考えをもっていたが，温泉はその家の宝であるというようなことで，仲々統合にふみ切れなかった。上諏訪温泉には530口もの温泉井戸があり，そこから一人なしポンプで温泉を汲みあげていた。隣同志が何年も互いに影響し合って，いたちごっこを繰り返していた。現在ではそのようなことは統合のおかげでなくなったわけで，本日はいかに統合が難しかったか，ということの一端を申しあげ，又，その温泉をどのように利用しているか，これからの利用計画について皆様に申しあげたい。

私が市長になってから，どうしても温泉を統合しなければいけない，ということで，いろいろ話をしたが仲々進まない。口では皆統合と言っているが，いざとなるとつかえてしまう。諏訪市には温泉組合があり，又市も温泉を所有していたので，市長が温泉組合長をやることになっていた。いやでもやらなければならない。温泉法を良くしらべ，組合の意見を重視しなければならないかどうか，掘さく，動力装置等の申請を出す前に組合で審議していたが，そのようなことの必要があるのか，近隣の同意が必要かどうか，等を良く検討した結果，いづれも必要ない，ということがわかったので，思い切ってやろうということになった。

最初にとりかかったのが，現在の老人福祉センター（以前諏訪保健所があった場所で，土地は市有地）にボーリングをすることであった。しかし一部の反対が強く，はかどらないので温泉組合を潰す以外方法はない，と判断し，あくまで温泉法で決められた手続きだけでやろうということで，組合長の私が辞めれば事務局を引き受けていた市役所の水道温泉部も事務局をやめるので自然消滅の形で組合を潰してしまった。

温泉統合は市がやるか，又は温泉所有者が集って組合でやるかどちらかにして，個人や会社にはやらせないことにした。ところが，組合でやるにしても，掘って必ず出るということがわかっていれば良いが，出なかったときはどうするか，結局市にやって貰った方が良いということになった。しかも既存温泉所有者にはそれなりの優遇をすることで統合に踏み切った。

それまでの温泉井戸の深さは，最も深いもので上総掘の限界250 mであったが，ここでは機械掘りで500 m掘った。結果は97℃で今までの上諏訪温泉の最高温度93℃（諏訪精工舎）を抜いて最高となった。（湖柳源湯）

次に，湯之脇地区（ここは上諏訪温泉でも古い歴史を持っている地区）で組合ではできないから市の思う通りやってくれ，と言われ，着工した。（温之脇源湯）

組合で統合し掘さくしたのは，小和田地区と湯小路の2地区である。

その後，市役所の近くの弁天町，高島町地区でも市による掘さくを行ない，80℃以上の温泉を得ている。（南部源湯）

こうしたことで源湯の統合がおよそ完成し共同浴場や家庭への給湯がふえた。そして個人給湯の希望がふえるだろうということで更に新しいボーリングを行なった。場所は市営プールの近くで，ここは以前から温泉井戸があり，僅かな量が出ていた。掘り進むにつれ温度が上がり始め，

300 mで温度計の目盛をこえ100℃くらいになり，それ以上は良くわからなかった。500 mまで掘り，昨年（昭和56年）1月24日，粘土水を洗い出す作業に一旦とりかかり，中止したその夜，突然湯が噴き出し大騒ぎとなった。（あやめ園源湯）

次に温泉の利用についてお話しする。

上諏訪温泉の総量は13,000ℓ／分あったが統合してからは55ヶ所の共同浴場，その他個人給湯も含めて約8,000ℓ/分で間に合い，毎日50,000人が利用できるようになった。統合温泉の有難さを身に感じている。諏訪市の西山地区（西方山麓地帯）には温泉がないが，昭和16年に合併した際温泉に余裕があったら給湯する約束があった。同時に合併した四賀地区には昭和30年に給湯されており，西山地区だけが残されていた。今回量的に余裕ができ，配湯管も保温性の良いものがあったので温度低下も少なく，（75℃で送られたものが10㎞で65℃で到着）西山へ送湯で共同浴場が20ヶ所できた。費用も相当かかったが，本管分の半分は市が出し，残りの半分を地元負担とした。

私は20年間市長をやっており，私のやった仕事はすべて市民から嬉ばれているが，中でも温泉程嬉ばれるものはなかった。来年は市長をやめるつもりだが，どうも温泉のせいでもう一期やらなければならないかもしれない。とに角，温泉統合に成功し，全市に配湯したことほど嬉ばれたことはなかった。しかし，若しいつか湯が止まってしまったら困るので，予備に1,000 mの井戸を掘っている最中である。

又，蒸気の利用についても，今のところ捨てているが，107℃くらいあるので，試みにプール加熱に使ったところ，25mプールは24時間で水温が30℃をこえ，50mプールでは24時間で28～30℃になり，プール使用期間をのばすことができた。

市役所から約100 mのところに掘った南部源湯のポンプ場は市役所構内に設けてあり，その熱で市庁舎の煖房をしている。そのために燃料代を70%節約できた。又，市役所の隣りの城南小学校も温泉煖房に切りかえる予定である。（57年秋から実施した。）元の温度は85℃であるが，煖房に使った後は80℃となり，それを市内に配湯している。

統合せず以前のまゝだったらおそらく冬季間は皆が困っていただろうと思う。今では多くの家族で蛇口をひねれば水道のように温泉が出る。又，家庭の浴槽も65℃の温水が入ってくれば（毎分）3合も入れておけば適温となり5合も入れれば熱すぎ，水でうめると水道料金がかかる。

日本で最初，おそらく世界でも最初の温泉熱による冷房が諏訪精工舎で行なわれている。92～93℃300ℓ／分の温泉が8,000の建物を冷房している。今とりかかっている1,000 mボーリングにより蒸気が出れば，この文化センターでも冷房をしたい，と思っている。

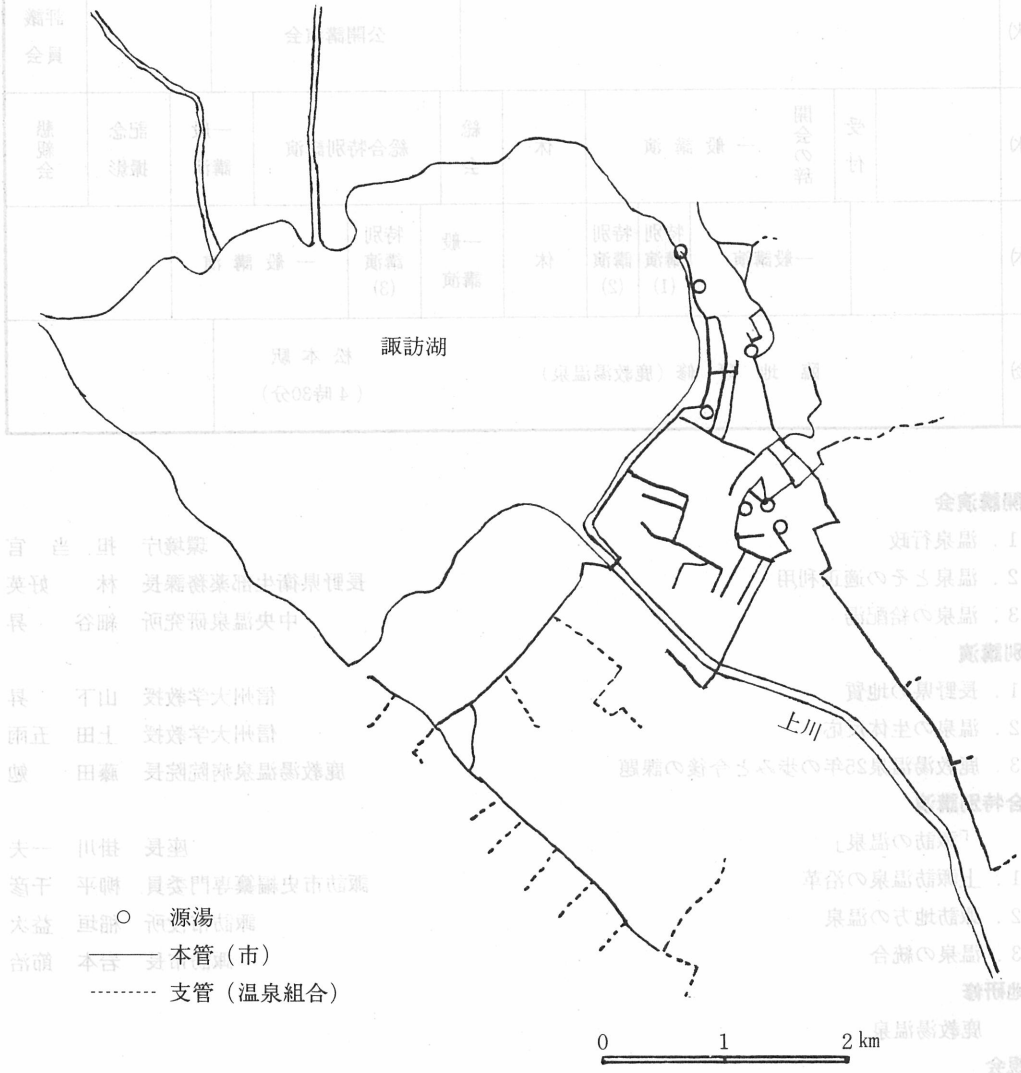
湯を沸すのに石油を使わなくなったので，農協では石油の売れゆきが悪くなったそうである。

最後に地質について，学者ではないが考えていることをお話ししたい。あやめ園源湯の沖，水深1.5 mくらいのところに曽根遺跡という所がある。そこでシジミをとると，じょれんに矢の根石がかかってくる。そこで矢の根を作っていたと思われる。何故湖中にそんなものが出てくるかと言うと，私はそこが昔は陸ではなかったか，と思っている。私は学者でないので信用して貰えないかも知れないが，諏訪湖の成因には三通りの説がある。①，陥没，②，噴火口，③，八ヶ岳火山の噴火により釜無川へ流れていた水がせきとめられた。私はいろいろな仕事をやっていて，③の釜無川へ流れていた水がせきとめられたのだと思っている。上川のふちにし尿処理場を建設した際，井戸を掘ったが，70m地下にスクモ，つまり葦等の根がそのまゝ残っている層がある。これは八ヶ岳の噴火によりせきとめられて，昔諏訪神社附近まで湖水だったと伝えられているように，順次天竜川の方へ水が流れ出して今のようになった。曽根遺跡には温泉がわいていて，黒曜石を茹でてたたき，矢の根を作っていたと想像している。当時は横河川にしろ砥川にしろ全部

の川が釜無川へ流れており，下硫討温泉よりも上硫討温泉もその川沿いに分布したのではないか，と思っている。

これからの温泉利用については発電をしたいと思っている。しかし今のまゝの温泉では全部発電用に使えば2,000 KWくらいは出ると思うが，もともと温泉が欲しかったのであり，行きがけの駄賃程度に発電をし，建設中の温泉植物園で利用できる程度の電気が得られればもうけものと考えている。今掘さく中の，1,000 mのボーリングで大量の熱い湯が出たときに専門に発電用に使えば相当量の電気が得られると思う。

これからは温泉の恩恵に嬉んでいる市民を失望させないように温泉を確保して行かなければならないと思っている。



市営温泉配管略図